

の人か判らないが、我々三人がいたら我々狼部隊の歩兵将校や患者と会った。我々は単独行動しているので、我々の今までの行動を認めてもらわなければ、逃亡ととられてしまうことも心配だった。そこで、理由を言っつてその指揮下に入るようになった。

それから先も、ジャングル、ジャングルの連続で、その中で飯を炊き、水も見つけて四、五日いた。その後、六月二日と記憶しているけれど、やっと連絡がとれた。

迎えに下士官が来た。三人はこじき同然の姿だった。部隊はタトシ市のゴム林にいた。本隊には、長の松山が先に帰って、我々三人の様子を報告していた。ところが、我々の山口の報告と違うという。松山は、我々を置き去りにして実際は、ビルマ人に変装して逃げたしまったから、相当虚偽の報告をしていたらしい。そのため長の松山は上官に呼び出されて、叩かれたらしい。そのため松山は私をうらんでいた。松山の班長からもうらまれていたらしい。

終戦はヤダチゴム林で聞いた。十一月までムドンで

抑留された。雨期になったので、今度はマンダレーの王城に抑留された。昭和二十二年八月、ランゲーンに出て、八月二十二日、宇品上陸、復員した。

ビルマの「狼」部隊から 方面軍憲兵へ

長崎県 三宅 一郎

―三宅さんの軍歴を拝見すると、ビルマに行かれ南方軍の憲兵隊で教育を受けられたようですが、昭和何年徴集でしたか。

私は大正十二年一月十六日、長崎生まれですので、昭和十八年徴集で、徴兵検査では第二乙種でした。その時は、パラオの南洋庁の総務課に勤務中で、セレベス経由でジャワへ行くつもりでいたのです。そのため徴兵延期をしないで内地に帰ったのです。

体格も余り良い方ではなかった上に眼鏡をかけておったため第二乙種で、入営せずということでした。その

ため、そのまま長崎県庁の商工課へ勤務していました。

ところが、昭和十九年三月十一日、教育召集により、長崎県大村の歩兵第一四六連隊補充隊に入隊、同日第七中隊に編入された。そこで中隊人事係より経理幹部候補生にと指示命令されましたが、私は幹部候補の受験をせず、出来れば兵卒のまま職業軍人にならず早く帰って欲しいとの母の願いで、幹候志願を断りました。そのため、私は直ちに人事係より南方要員にされました。

正式な軍隊履歴によると

「四月四日、軍令甲第三七号に依り、四月六日歩兵第一八八連隊第七中隊に編入、教育召集満了につき、六月五日召集を解除し、同日付臨時召集」とあります。ですから営内で教育から臨時へと召集が引き継がれたわけです。

その頃、第四十九師団（狼）が編成され、隷下の歩兵第一五三連隊が、五月二十七日、軍令陸甲第五九号により臨時編成下令となります。私は臨時召集のまま、その歩兵第一五三連隊へ転属となったのです。ここで、

私の運命が変わり、結局ビルマ行きとなったわけです。

入隊して三ヶ月余の六月十四日、門司を出港、同日朝鮮の釜山上陸、列車で北上、十五日には竜山着、現地編成されていた、歩兵第一五三連隊第八中隊に編入され、やっと落ち着いたので。

竜山での編成では、朝鮮の兵隊も一部編入され、釜山、門司と行き、一時上陸、内地ともこれでお別れかと、七月早々門司港を出帆し、七日台湾基隆寄港着、九日同港発、いよいよ危険区域へと入っていったのです。潜水艦の魚雷、空襲等常に嚴重に監視しつつの、薄氷を踏む思いの日々でした。

目的地はフィリピンのマニラです。五、六隻の船団なのだが、護衛の駆潜艇は一隻だけ、当時日本の海軍力も低下し、飛行機の護衛なし、という裸同然の航行です。七月十五日、マニラへ入る前、僚船の油送船が潜水艦の魚雷攻撃でやられた。我々の船は全速力で、マニラ湾に突込み、とにかく助かった次第です。

七月二十三日、今度は護衛艦なし、機を見て単独で仏印のサイゴンへ直行です。ここは一番危険な海域の

一つで、何時やられるか判らない。そのため、我々は船倉に入らず、全員デッキへ上がったまま、魚雷監視と、万一の場合の待避のためです。自衛力のない輸送船は、攻撃を受ければ、やられっぱなし、唯沈没を待っただけ。百発百中やられると覚悟していたが、二十八日、無事サイゴンに上陸出来た。

―これからは陸路、ビルマ入りとなるわけですが、その間の状況を軍歴表で話をしてください。

八月二日サイゴン出発。九日、泰仏印国境通過。十日バンコック着。バンコックで十数日待期、二十三日出発。いよいよ、国境通過、泰緬鉄道によってビルマへ入った。鉄道は、峡谷に材木で、橋桁を組んである。キシキシ、きしみながら、列車はゆっくり走る。空襲もありゲリラもいる。危険は毎日だった。

九月三日、ビルマのアランミヨー着、同時に部隊は第三十五軍司令官の指揮下に入る。十四日、アランミヨー出発、十日間かかって、エナジャン着、油田警備にあたる。十一月十二日まで、同地で第十一防衛管区の防衛に従事。防衛といっても、当時、日本軍は、

インパール作戦、中国雲南国境付近の拉孟、騰越やミイトキーナ等の戦線を整理、撤退中という悲惨な状態であった。

その頃、私は師団命により、馬来のクアランプールにある南方軍野戦憲兵教習隊へ行くようにいわれた。受験のためベグーへ黒砂糖を積んだ牛車の上に乗って、十一月十二日単独で、エナジャン出発、チョークへと向かった。

チョーク着前、トラックにて再び命令が来て、同日、列車にて憲兵候補者とし南方軍憲兵教習隊に分遣のため直ちに出發する。クアランプールに到着。無事第三中隊に編入、十日付で、南方軍憲兵教習隊に転属しました。

教育期間は、正月を挟んで約百日程度でしたが、集中的な教育で、治安、諜報など、憲兵の職務を中心とし、密度の高いものでしたが、私も相当頑張ったつもりです。そのためか、二十一人の代表となりモールメン憲兵隊に申告するなどで、結局私と他一人がビルマモールメン隊本部に残り、他の人々はそれぞれ分遣隊

へ配属になった。

隊内での食事等は比較的良く、警備隊の衛兵所の巡察なども行い、同じ階級でも、他兵科の者が向こうから先に敬礼するなど色々でした。憲兵は下士官になると、職務上から、大尉まで取り調べる権限を持っているので、他兵科の者は一応敬意というより敬遠していたのでしよう。

その後、緬甸方面憲兵隊転属、四月七日、クアラールプール出発。二十日、泰緬国境通過。二十四日、モールメン着。と同時に緬甸で実施中の「克作戦」に参加したのが五月三十一日まででした。

一終戦となると、憲兵隊は大変だったと思いますが、その辺の状況を話してください。

終戦になり、憲兵はモールメン刑務所に投獄された。軍属や補助憲兵は、一寸取調べられ帰された。我々は刑執行を覚悟していた。獄中での給与は、食料半減、いっぺんに殺さず、苦しめながら、じわじわ殺すためのか餓死寸前まで追い込まれたこともある。

しかし、我々を横隊に並べ首実験のため、多くの住

民が見え、一人一人、顔を調べて通る。指をさされたら、直ぐ独房へ連れていかれる。刑死は覚悟しなければならぬ。

そんな関門を通過して、我々はモールメンからラングーン刑務所まで送られた。これで「しゃ場」の見納めかと思った。原住民のうちには、作戦中、スパイ容疑などで拷問をかけられた怨みもあつたろうし、また戦勝国民とし、日本軍人、特に憲兵は仇を討たれたことであろう。また、間違つて罪人にされた者もいた。当時、憲兵は、軍事、司法警察権を持っていたのだから、その反動は大きかったと推察する。

そんなことから、我々は、もう生きて故郷には帰れないと、二年余り獄にいた。刑務所の中の生活は、一応の労役というより使役はあつた。コンクリート製の長い露天の浴槽に、ドラム罐を半分切った桶に水を汲み、担いで入れる。それで水浴するわけです。草むしり、便所掃除。巡察が来ると作業を止めて敬礼をしなければならぬ。作業が終われば、手作りの麻雀（パイは自製）をやったり、和歌、俳句など、檻の中

でも、諦めながらの生活でした。

そのうちに戦犯の身は解かれ、アロンキャンプへ移された。キャンプにて戦後の日本の「リンゴの唄」等を聞いて感激しました。

老いし身に　むち打つ励む　待つ母の

姿偲びて　涙くもらん

の短歌を見て、ますます望郷の念にかられ、これで、生きて帰れると思うと涙が出た。内地への手紙は、刑務所にいることは書くことと検閲でひっかかるのだが、私は抑留されていることを書いた。家では、とにかく生きていくということが判っていた。母は毎日不動様に生還を祈っていたという。

昭和二十二年八月、最後の引揚船「平安丸」に乗船し、三年二ヵ月ぶりに佐世保に上陸、復員することが出来た。

―その他、特に思い出として残ることは。

家に母を残し、母も毎日私を案じ、心安まることは無かったという。しかも、私は狼兵団(第四十九師団)というビルマ戦末期、方面軍の撤退救出という任務を

持った部隊に召集され、多くの戦没者の中に入らず、我々一個師団のうち五〇〇名有余が残り帰国出来た。

また、戦後、生きて還れない憲兵とし、首実験で死刑にもならず。刑務所生活でも、一日ミルク缶一杯の重湯、ジャングル野菜といっていた雑草の副食、蠅が入ったミルク。生きて帰ることのみに望みを托していた毎日。

終戦時のモールメンでの異常な暴徒の中、一応軍刀を下げて巡察をして歩き、事なきを得たこと。戦場の悲惨さなど、併せて思い浮かべると、戦争はしてはならないと痛感している。

しかし、戦争を知らない、その苦しみを知らない今の一部の若い人たちの、愛国心の欠如、親や目上の者を敬わない。金さえあれば、自分さえよければ、他はどうでもよいとか。このままで、果たして日本国はこれでいいのだろうか、そんな事を考える日々である。